

the People

元気なまちには 元気な主張を続け
元気に行動する 市民がいる

the people (ザ・ピープル)
2011年 5月発行

発行：特定非営利活動法人 ザ・ピープル
代表者：吉田 恵美子
所在地：福島県いわき市小名浜字本町11-1
まちづくりステーション小名浜内
TEL/FAX：0246-52-2511
E-mail：the-people@email.plala.or.jp
URL：http://www.iwaki-j.com/people/

いわき市小名浜地区 災害ボランティアセンター始動!!

3月11日14時46分。本会では月例のスタッフミーティングが早めに終了し、事務所内で細々とした打合せを事務局員が行っている最中、携帯の地震アラームがけたたましく鳴ると同時に大地震が始まりました。立ってられないほどの大きな揺れと大津波警報。ここから私たちにとって当たり前の日常がガラガラと大きな音を立てて崩れ始めました。いわき市内の被害は、死者行方不明者は300名を越え、被災家屋は10,000件に上っています。特に、海岸沿いのエリアに関しては、勿来・小名浜・豊間・薄磯・四ツ倉・久之浜と連続して津波の大きな被害を蒙りました。



震災後真っ先に本会に連絡が入ったのは、兵庫県のカーペット会社からでした。「神戸大震災の教訓から、必ず避難所で必要になるから…」と、自社のロールカーペットを4トントラックを仕立てて運んでくださるというのでした。最近お付き合いを始めさせていただいたばかりの事業所からのお申し出に、甘えていいものかと迷いながらお願いしました。実際にカーペットが届いていることを確認できたのは、福島原発事故による屋内退避・ガソリン不足などの混乱がある程度落ち着き始めた3月20日過ぎになってからでした。いわき市競輪場の救援物資倉庫に整然と並べられたカーペットを目にして、私たちは自分自身で配布しなければならぬと考え、小名浜地区の各避難所に届けてまわることになりました。

そのときに役立ったのが、放射能汚染から赤ちゃんたちを守ろうと小さなお子さんや妊婦さんに関西に移送する目的で急遽レンタルしていたマイクロバスでした。実際にこのマイクロバスで移送した赤ちゃんはいませんでした。ガソリンを満タンにしていたマイクロバスの存在が私たちに次に行動する方向を示してくれました。そして、そこから本会の避難所支援の活動が始まりました。「公的な配給の仕組みの中では十分に叶えきれない被災者からの様々な要望に出来るだけ応える」というコンセプトで動くことを確認しました。

本会では独自に自分たちのできる形での被災者支援の活動を約1ヶ月にわたり続けました。その中で、同じようにいわき市小名浜地区の中で活動する若者たちとの出会いがあり、共に「いわき市小名浜地区災害ボランティアセンター」として活動していこうということになりました。そして、被災されている方たちにとって安心して相談を持ちかけられる相手になるために、公的な動きとの連携も欠かせないだろうということで、いわき市社会福祉協議会の中に設けられているいわき市災害救援ボランティアセンターの傘下に入り、その地域支部的な動きをすることと致しました。4月19日にはその「いわき市小名浜地

区災害ボランティアセンター」の旗揚げを行い、正式スタートしました。センター事務所は、地域のある事業主の方から提供していただきました。建物の1階部分が広いガレージになっているその事務所には、ボランティア活動に必要な資器材が整然と並び、地元のtent屋さんのご厚意により設置された5間幅の大型テントには全国各地から本会宛に送られてきた救援物資の数々が持ち込まれ、その出番を待っています。2階事務所にある電話・パソコン・コピー機などもそのまま使わせていただき、毎日センターに来て協力を申し出てくださるボランティアの方々と津波などの被害を受けておられる方々との間を繋ぐ作業を進めています。簡単なものではありませんが、ホームページも立ち上がりました。<http://onahama-volunteer.jimdo.com/>で、覗いていただければ幸いです。

仲間が増えるということは力が何倍にもなって加わることです。

これとは別に、本会では震災後「避難所母さんたちの元気プロジェクト」と名付けた事業を行ってきました。これは避難所におられる母さんたちに自炊で炊き出しを行ってもらい、明日への活力を取り戻してもらおうという事業です。調理用の器材や食材の購入費用は熊本県玉名市に本部を持つ「NPO法人れんげ国際ボランティアの会」が提供していただきました。避難所に浮かぬ表情で座っておられた女性が庖丁を手に野菜を刻み始めた途端に生き生きとした表情を浮かべる様子を目にして、私たち自身がパワーを分けていただくような心持ちがしました。野菜は、いわきの野菜を購入して風評被害に苦しむ農家を助けようということで、いわき産にこだわってきました。いずれ、この調理チームの中からは配食サービスや弁当販売の事業を手掛けられるような人材が育ってくれることを願いつつ、本会ではこの事業を手掛けてきたのです。

震災から2ヶ月を過ぎ、いわき市内では避難所の統合が進みつつあります。一時期は17,000名を数えた避難所の収容人数も現在は1,100名ほどにまで減少しています。(5月18日現在)しかし、これは問題の解決を意味するものではありません。避難所を出た方々の今後の生活にも、様々な課題が待ち受けているからです。私たちはこうした方々に寄り添っていくことの出来る災害ボランティアセンターでありたいと考え、センター業務は今後も継続していくことにしています。そして、本会ではそのために全面的なサポートを行うことにしています。皆様のご理解とお力添えを重ねてお願い申し上げます。

これまでたくさんの皆様からご支援を頂きました。ありがとうございました。



これは、いわき市小名浜地区の避難所で行われている活動の様子です。ボランティアの方々が被災者の方々に支援を行っています。

これは、いわき市小名浜地区の避難所で行われている活動の様子です。ボランティアの方々が被災者の方々に支援を行っています。



古着と人生 ⑤

は、確実に全国に広がっていると感じ始
めていた。その矢先に起こった東日本大
震災。地震と津波、更に原発問題が加わ
り想像を絶する大災害となつてしまつた。
▼県内外から本会を支援したいとNPO
が視察に来られた。その際、先導車で現
地を案内するのは私の役目。海岸線に沿
って破壊状態の現場を案内するや「映画
でみる爆撃以上だ！」と言つたり皆さ
ん呆然と立ち尽くされていた。津波で家
を失つてしまつた方々の避難先は市内の
公民館や小中学校等38ヶ所。当初450
0人の方々が不便な避難所生活を余儀な
くされていた。本会では避難所へ物資を
届けながら、ニーズを聞くなど支援活動
にいち早く取り組んだ。▼阪神大震災の
時もそうだったように災害時における最
初の支援はどうしても衣類となる。それ
は自然な流れかもしれない。そのため各
避難所に届けられる古着の量は物凄いや
となった。ひとりひとりのニーズに
ての支援ではないから仕方ないと思う
最終的に古着のリサイクルを行つてい
る本会に引き取って欲しいという要請が各
避難所から次々入つてきた。時節柄ど
この家も片付けの時期。かくして提供され
る古着は津波のように本会に押し寄せ
てきた。ボランティアの仕分作業が間に合
わず既存の倉庫はたちまち満杯に。他に
倉庫を借りても直ぐに満杯。止むを得ず、
電話を下さる方には数ヶ月待つて欲しい
とお願ひしたり、回収ボックスを閉じたい
りして対応して来た。▼有り難いことに
全国的なネットワークで新品衣類が送ら
れてくる。下着、シャツ、靴下、長靴、
タオルなど多種多様。この流れは今も止
まることがない。幸い「いわき市小名浜
地区災害ボランティアセンター」を立ち
上げたことから、届けられた物は全てボ
ランティアの皆さんの労作業で見事に整
理されている。必要としている方々に、
時間を置かずお渡しできることは嬉しい
限りである。▼ところで先日、原発から
20キロ圏内の方々1300人が暮らす、い
わき市内の避難所から沢山のニーズが寄
せられた。葉、傘、長靴、シャツ、下着
等約400点。次の日トラックで届ける
ことができた。フロアに広げられた品
物の前に時間毎に順次来場された皆さん。
どの方も身ひとつで避難されたと言つ
ている。見通しのない生活にどれほど不安を抱
いているだろうか。そんな思いで話しかけ
ると「これでひと安心、ありがたいです
ね」と笑顔で語ってくれた。私自身ほつ
と安心。ピープルの使命はこんな所にも
あつたのだと呟っていた。